

平成 28 年度 第 1 回 尼崎市総合教育会議 議事録

【日 時】 平成 28 年 7 月 11 日 (月) 午後 1 時 30 分 ~ 3 時 05 分

【場 所】 尼崎市役所 4-1 会議室

【出席者】 尼崎市総合教育会議構成員

稲村 和美	市長 / 座長
徳田 耕造	教育長
濱田 英世	教育委員
仲島 正教	教育委員
礪田 雅司	教育委員
徳山 育弘	教育委員

関係者 (尼崎市総合教育会議設置要綱第 5 条)

村山 保夫	副市長
高見 善巳	教育次長
西川 嘉彦	教育次長

【事務局】 企画財政局 ひと咲き施策推進担当 (吉田部長 ほか)

【資 料】 ・ 次第
・ 資料 1 尼崎市総合教育会議 構成員名簿
・ 資料 2 旧聖トマス大学の活用について
・ 参考資料 1 旧聖トマス大学の施設活用と整備の方向

【次 第】 開 会
1 構成員紹介
2 旧聖トマス大学の活用について
3 意見交換
4 その他
閉 会

【議 事】 (敬称略)

稲 村 (資料説明)
徳 山 素晴らしいと思いましたが、これから具体的にどうしていくかが重要ではないかと聞いていて思いました。

法的な面で注意しなければならないのは、情報の取扱いです。ただし、この情報については制約があるにしろ、出来るだけ市の様々な部署で共有、提供、分析、集約するところに上げていける体制にすることが重要だと思います。だから、どこに公開して、どこには公開しないということをもまず明確にした上で、スタートするまでに一番留意しなければならないのは、情報が集約されることはそれだけ

責任も増大するし、知り得た立場であればあるほど、例えば、いじめの問題など様々なマイナスイメージのことが起こった時に対処責任が問われてくるわけですので、その取扱い・情報には様々な段階があると思いますので、危険度が高い情報はすぐにしかるべき部署に分析して対処できるという体制を作ることが重要だと思います。

そうすると子どもの育ち支援ワーカーとかとの連携は必要不可欠だと思います。研究テーマのところでは、評価の方法ですが、最近教育委員になったばかりでよく分かりませんが、今でも評価の主なものは成績ということになっているんですか。

稲 村 そうですね。

徳 山 そうすると、今情報が入ってきているものの分析としては、その子どもが前よりも成績が伸びているということは、その子ども自身の頑張りか、環境によるものか、塾など何か変化があるでしょうから、その分析をすることが他の生徒へのフィードバックにも重要だと思います。

同じように、今まで登校出来ていた子どもが急に不登校になったり、心に変調をきたしているのであれば、まずその子ども自身の問題を分析をすることによって、その子どもが前向きになれるように丁寧に取り組むことで教育効果が上がっていく。それが、同じような地域で同様のことが起こっているのであれば、それは学校側の問題というより地域性の問題でしょうから、その分析をしていく必要があります。一人ひとりに着目し、改善することでスキルも上がっていきますし、それが地域全体の問題であるよりも学校側の役割、また、それぞれの子どもの問題なのであるならば、保護者の責任もあるはずです。

そういった分析をすることが、魅力的な尼崎の教育に繋がっていくんでしょうから、先ほど市長がおっしゃられた非認知能力という評価方法をしっかり考えていけばいいと思います。ただ、学力テストの分析と違うところは、それぞれの個人を見る必要があり、評価基準というよりはその子どもの尺度を見て、前より良くなった悪くなったというところの評価の尺度を新たに設ける必要があると思いました。

稲 村 ありがとうございます。どんどん議論していきたいと思います。今の学力実態調査は個人をずっと追いかける要素は少し弱いですね。

徳 田 弱いです。

稲 村 尼崎の学力全体が全国と比べてどうなのか、以前と比べてどう変化してきたか、各学校の現状はどうなのか、という分析が主なので。ただ、この時にこの学年の子が、3年後どうなっているのかというのは見て頂いているんですけども、今の分析では、一人の子どもが成長過程でどういう影響を受けているとか、どういうところに効果が上がっているかというところは弱いので、そこをこれから頑張っていければいいと思います。

徳 山 以前に、スクールソーシャルワーカーの相談に乗っていたことがあり、そのスクールソーシャルワーク(以下「SSW」とする。)で関わっていた子どもの少年事件の弁護の付添人をしたことがあります。その裁判所が調査した情報というのはスクールソーシャルワーカーの関わり具合などがとても分析されていて、その情報を引っ張り出せるのが一番いいんですが、さすがにそれは難しいと思います。

様々な子どもの非行行為の調査報告書を見ていると、大半が親の愛情不足で、親の愛情欲しさに気を引く行動をとるという印象を受けています。それが同じような地域で起こっているのであれば、愛情を感じられるように子どもをより保護してあげる必要がありますし、その分析は非常に重要だと思いますので、是非、前向きに検討して頂きたいと思います。

稲 村 「ご家庭で頑張ってください。」と言うだけでは不十分なケースについても、少し何か役割をもってもらえるような、居場所や出番をつくっていく取組を子ども
の育ち支援センターで出来たらと思っています。

この(旧聖トマス大の)敷地全体、もう少し長いスパンで学び合うような空間
にしたい、その中でさっき言いました自己肯定感とか自尊感情とかそういったもの
を取り戻せるようなプログラムにチャレンジしたいという思いがあります。それ
は皆がよってたかって関わらないと出来ないことだと思います。

磯 田 教育総合センターについてですが、我々委員は深く携わっており、よく出入り
させて頂いて、機能的な内容をよく分かっているのですが、一般の方は全然知り
ません。現状では、先生方の研修センターの域を脱していませんが、教える立場
の先生が向上することによって、一般の方々に還元しています。今後は、一般の
の方々が簡単に足を運べて、それぞれの抱えている課題や問題を解決できるような
研究機関のフィードバックが出来るようなものが欲しいなと思います。発達障害
の子どもを抱えてどうしたらいいのかと悩んでいる時には、現在でも教育総合セ
ンターで相談することも出来るんですが、そういったことも PR 不足です。

それで、今も言っている学力・生活実態調査も含めて高校の制度が変わる中で
情報不足によって不安に思い、噂などに左右され、尼崎の子ども達は大変だとい
う噂が走っていきます。

実際、成績を見るとそうでもないことは、はっきり言えますが、そこを一般の
生徒、児童、保護者に PR 不足ですので、そういうところも含めて教育総合セン
ターとして発信力があるというコンセプトのもとで取り組んで欲しい。今後は最
先端の情報発信基地であって欲しいと思いますが、現状では、教員の研修センタ
ーだけにとどまっており、非常にもったいない状態であると思います。

稲 村 一応、障害のある子の相談など、これまでの教育総合センターの建物に残る機
能もあるんですね。

徳 田 はい。特別支援プラス教育相談。その教育相談の部分を今後、子どもの育ち支
援センターの中にどう取り込んでいくかを検討しています。今は小学生・中学生
ぐらいの子どもが対象ですが、就学前の子ども達や高校生の相談とかも対象にし
ていくかもしれない。

稲 村 それはまだ旧聖トマス大学にくるかもしれないということですね。

それから、とにかくそうなんです、発信力。今、施策評価という毎年の事業全
般に対して振り返りをしている最中で、市民にとって教育の重要度は高いんです
が、満足度は20施策中の20で最下位なんです。でもちょっと心外ですよ。な
でも言っても仕方なくて、皆さんが率直にそう感じていらっしゃるわけです。

磯 田 非常に成果が上がっていることを我々委員は実感していますが、その成果を伝
える機会が少ないのが現状です。

教育長は学校現場へのフィードバックが大切だとよくおっしゃっています。校
長先生方にもことあるごとに保護者に対して発信をするようにお伝えしていま
すが、なかなか学校現場で保護者や子ども達に向って情報発信する機会が非常
に少ないというのも実感しています。

徳 山 私も教育委員になって数ヶ月しか経ちませんが、こんなに頑張っていると思っ
ていませんでしたし、全く知りませんでした。また、学校に期待していない人が
非常に多いと感じています。

稲 村 特に今は親の年齢も昔に比べると幅広くなっているんですけども、自分が学
生だった時に学校が荒れていた世代が今の親世代には結構おられて、学校への信
頼感が低い傾向があるみたいですよ。それもあるのかなとは思いますが、それ
でも、情報を保護者の方は欲しています。先週、PTAの指導者研修会に講師で
呼ばれた時に、こういうことをやっていますという色々な話をすると、驚かれま

す。要するに、PTAの執行部の方々でも教育委員会の取組が分かっていないということです。だからもっと発信して、安心して頂くということが大切です。情報が無いことで、非常に不安に思われていることを実感しました。

稲 村 私も就学前の保護者の方と車座集会をしました。色々聞かれたことにお答えして、私達がしている取組などをご紹介したのですが、皆さん口を揃えて、尼崎がこんなに教育に力を入れているのを初めて知りましたとおっしゃっていました。尼崎は教育に熱心じゃないと思われており、非常に心外だなということで私も危機感を持っています。

ただ、それをしっかりと伝えるには、私達が自分で言っているだけではなく一定、実際のデータや効果などをちゃんと表現していかないといけないと思います。十分に発信できていないという反省はありますが、特に学校の勉強自体もそうですし、先ほども申し上げた、社会力みたいなところも含めて、尼崎はとても育む力があるまちだと思うので、そこをもっと発信したいと思っています。

どういう風にデータ化するかは専門家の力も借りつつ進めたいですし、保護者の皆さんの心配ごとも、もう少し丁寧に聞かないといけないと思っています。

実は施策評価で事業の分析・検証を行っているのは、市民アンケートを基にした順位なんですけれども、市民アンケートは無作為抽出で選んでいる方が対象なので、別に今自分のお子さんが学校教育を受けてらっしゃる方が答えているとは限らないんですね。そういう意味では昔のままのイメージで止まっている方がいらっしゃるかもしれないです。そこら辺までは分析出来ないんですが、でも実際に特に皆中学校に心配しているんでしょうか。

磯 田 そうですね。

稲 村 高校入試を見据えた時に中学校が大丈夫かなという。でも就学する時に転出している人が多いです。ということは小学校にも不安があるんでしょうね。その辺も含めてまた色々分析する必要があると思います。

濱 田 (説明のあった取組が)いいものになって欲しいと本当に思っていますが、今の中学校の話、私は高校の評議員をしているので、先日集まりがあったのですが、高校から見ると中学校との連携が取れていないとか、受験のことにに関しての情報が入りにくく連携されていないことを問題視されていました。

稲 村 それはということですか。

濱 田 例えば、高校は高校で分析をしていて、どんな子ども達が来たとかが分かります。今は点数を開示しているので、この学校なら合格したとか落ちたとか分かります。それを中学校の先生が合格した生徒に聞いて、何点だったか合格したとか、どれくらいの点数の子がどこの高校に行ったとか、そういった情報を中学校が持っていません。そういう分析がもっと出来ると感じました。親もだんだん安全策をとってしまったり、中学校の先生も安全策をとってしまったり、もっと分析が出来ると指摘されました。尼崎は統一模試をしていると言ったのですが。

稲 村 尼崎は広域化対策として早めに模試をしていました。

濱 田 その割には、中学校の先生が思っておられる高校のランクと子どもの成績がマッチングしていないと思います。

稲 村 そういうデータを塾に負けないくらい分析出来た方がいいんですけど、まだ追いついていないという話と、そもそもそれを過剰にやることはどうなのか、というそもそも論とがあると思いますが、中学校の現場はどうなんですか。そもそも論での揺らぎがあるんでしょうね。

徳 田 あります。もともと文科省は、行きたい学校に行きなさいと言っています。一方で、行きたいと言っても成績的にどうなのかという問題が現実にはあって、せめぎ合いみたいなところがあります。そうすると、あなたはそこの学校は通りま

せんということ早く言った方がいいのか、もうちょっと頑張ったら通りますという言い方になるのか。

磯 田 望むと望まざるに関わらず、この制度が始まって2年経った今、3年生になる保護者の間ではおのずと高校の序列化が始まっているので、逆に正しい情報として我々が提供するべきだとは思いますが。そうでないと間違った情報でそういう風になると、我々が目指すところと違ってしまいます。県が制度を作った以上、我々が独自にやるわけにはいかないの、そこに乗っていくためにはそうなっても仕方ないと思います。

徳 田 ただ、市長も前からおっしゃってますが、尼崎市の公立高等学校はすごく多様です。普通科もあれば実業系もある、専門学科もあって定時制もあれば総合学科も、単位制もあります。非常にバラエティに富んでいますから、自分の行きたい学校に行けます。PTA 連合会の方が市内全体の説明会をしてくれて、今年から生徒も一緒に入って聞いて下さいとの声がありましたので、自分の学校のプレゼンをするために、そこに高校の先生や一部生徒も来ています。

稲 村 オープンスクールみたいなのをやってるんですか。

徳 田 もちろんそれもしていますが、オープンスクールは、だいたい1校しか行けないのに対して、説明会では何校も聞けますから、そこで絞っておいて、このオープンスクールに行こうかということが出来ます。

濱 田 もちろん学校の先生はこの学校に合格するとかは言えないですし、その学校は大丈夫というようなことも言えません。そういったデータ分析も含め、研究して欲しいと思います。

稲 村 ここで想定している研究は、塾でやるような分析というよりは、どちらかというと家庭環境や色々な社会的関係になります。

とにかく子どもの育ち支援センターもそうなんですが、貧困を連鎖させたくない。子どもは生まれる家を選べないので、やっぱりもう一度スタートラインを押し上げてあげたいという思いがあるんですけども、現実には明らかに連鎖が目に見えるわけなので、そういったところに問題意識をもった研究を出来ないかと思っていて、データの取扱いということに気を付けながらも踏み込んでやっていきたいと思っているんです。

徳 山 今、スクールソーシャルワーカーが家庭の中に入っているのですが、それぞれの家庭が抱えている問題を拾い上げて整理出来る立場にありますから、家庭との信頼関係が得られたらどんどん活用できるのではないかと思います。

濱 田 家庭児童相談とSSWと学校と、それから例えば主任児童委員とか色々な立場があります。

稲 村 そこが今切れているでしょう。今度初めて主任児童委員と意見交換会をさせていただきます。

濱 田 主任児童委員は地域のことをよく知っています。学校の知らないこともたくさんあります。

稲 村 主任児童委員の協力なしに子どもの育ち支援センターは上手くいかないと思っています。やっぱり、こういうところと、中学校単位の協議会、そういうところが上手く繋がってくるようになって、非常に管理をしっかりしないといけないんですけども、カルテ的なものがちゃんと皆で共有されるようになればいいと思います。

濱 田 それは良いと思います。発達障害ではあまっこファイルみたいなものがありますが、学校もよく分かっていません。例えば、アルバムみたいに写真をたくさん貼って自分の子どものファイルを作っているところもありますが、それを学校で先生がどれだけ言えるのかなという心配はあります。このような発達障害に対しては、何かこういったカルテのようなものが必要だと思います。

本当に自尊感情とかそういうようなことで、後伸びとか頑張っていることも繋げていきたいし、研究テーマのところでも色々あるんですけども、一つ、もちろん分析とかを学校にどうしたらいいかも大事ですけど、家庭教育というか社会教育の分野で親へ発信することも必要です。学校だけ頑張っている、子どもが通っている保育所や幼稚園だけで頑張っている、やはり家庭が一番なので、その保護者がしんどい家庭はしんどいです。

今日も午前中「やんちゃんこ」で遠足に行き、2歳の子どものお母さんと話していましたが、「来年から保育所に入れようと思っています。」と言うので、「仕事しないといけなくなったの？」と聞くと、「早く入れた方がもっと子どもが活発になるかと思って。」と、それは違うんですよって話で、「お母さんが自分で食べることも教えないといけないし。」と伝えると、「そういうことですか。」ということでした。親子で二人でいるより早く保育所に入れた方が早く賢くなるとか、社会性が身に付くとか、自分と家にいるより早く保育所に入れた方が良いと思っていました。そのお母さんが、「そうなんですか。では、まだ一緒にいてもいいんですね。」って言うから、「一緒にいれるならいてあげて。まだ2歳なのに毎日保育所行くななんて大変だよ。」って話をしました。親にそういうことが分からないとすぐ預けてしまって、「そっちでやってよ、なんで出来ないの。」となる場合もあるので、後伸びする力をどんどん親へ発信する機会が必要です。もちろん幼稚園や保育所の説明会でも、つどいの広場とかでも一生懸命発信していかないといけないと思います。親への発信は必要です。

稲 村 親の学びっていうのもサポート出来たらいいなと思いますが、学びとかは価値観に一定幅がある領域なので押しつけたらいけないとも思いますのでそこが難しいです。

濱 田 だから、地域の人などが活躍できると思います。学校の先生では言えない、仕事をしないで辞めたらという提案は、我々だから言えることです。地域力みたいなものを上手く使いながら、しんどい家庭をどんどん拾って行って、是非、子どもの育ち支援センターでそういうお母さん方や発達障害で悩んでいる人のフォローもして行って欲しいです。と言っても、その人達が窓口が出来たらすぐに行きますか、と聞いたらそこへ行くまでも勇気があることですので、今ある既存のグループや施設も上手く巻き込んで、新しいものや窓口ばかり作っても、そこに行けない人もいますので、手前で拾うところとも繋がりが、お母さんのところに届くとかお母さんがセンターに届くような水面下の仕掛けもたくさんしておいて繋げて頂きたいと思います。

主任児童委員が知っているのにスクールソーシャルワーカーが知らないこととか、引越していてもスクールソーシャルワーカーが知らないとか、実はたくさんあるので、その人達の連携をしっかりとサポートして欲しい。

稲 村 主任児童委員は、虐待対応は西宮にある県の児童相談所としっかり結びついています。県の児童相談所と市が繋がっていないわけではもちろんないんですけども、やっぱり非常に専門性のいる仕事ですし、今西宮と尼崎を両方を一括して見る児童相談所が県立であるわけなんですけれども、国の方は家庭児童相談所を中核市に下ろしたいという強い意向を持っていて、尼崎市の場合は隣の西宮市も中核市ですし、今この両市を一つで見ているものを分散した方が本当に良くなるのか、財源や人材の手当てができるのかを含めて慎重に見ないといけないところはあります、繋がっていないといけないのは間違いないので。

尼崎市は中核市と政令市に囲まれた特殊な中核市というのはあるんですが、中核市市長会の中でも急にやるようにと言われても、人の生死に関わっているので、それは乱暴だよと国には言っているんですけども、もし、しっかりと財源の裏付けや人材確保の目途が立つのであれば、いずれは中核市が実施してい

く流れになるのかな、とは思っています。

徳 山 西宮のこども家庭センターは一人の職員が案件を抱えすぎていて、中には、重篤な虐待案件が多く、そちらに意識が集まり、ちょっとした問題案件が後回しになることもあると思います。

稲 村 それであれば、比較的軽いといったらあれですけど、そういう案件を基礎自治体に下ろしてもらって、本当に重たい案件だけ県でしてもらおう分担が出来ればいいと思いますが、そう上手くはいかないのでしょうか。

徳 山 こども家庭センターは比較的すぐ対応してくれますが、担当者の個性というか、熱心な方が担当になれば、親身になって一緒に対応出来るが、人によっては何回電話をかけても折返し電話もかかってこないこともあるようです。

稲 村 まさに各中核市も同じで、人材がちゃんと確保できるのか、今よりも財源が厳しくなるような状態で引き受けてしまったら、さらにそこに課題が出来てしまう。明石市だけ今前向きに考えておられますけれども、なかなか全部の中核市が前向きにはなれていません。ただ、私は子どもの育ち支援センターがそこを睨んだ機能というか、県・市の役割とかは子どもには関係ないことなので、ちゃんと関わられるようにとは構想しているんですけども、教員（採用を含む人事権）の権限移譲にしても児童相談所の権限移譲にしても、市の権限になったから急にやるとか、そうじゃないから全くやりませんとかそういう話ではないと思うんです。そういう意味では、今でもやれる範囲でしっかりとやっていきたいし、ゆくゆくは制度上、自分達の役割になった時にスムーズに受けていく道にもなると思っていますので、そこら辺を睨みながら。ただ、今すぐ無防備にやり始めると大変なことになると思います。やっぱりそれなりの学校の先生は確保できないといけないうし、相談員も必要ですし、色々なことを準備できないで丸腰で拳手することにはならないな、と。かといって、やりたくないとか、やらないでいい、とかいうことではないという認識です。話が外れました。

仲 島 サピエンチアタワーの8～10階をどう使うかという話と今の話が、なかなか上手く繋がりません。最先端の教育改革と聞くと、とても良いなと思うのですが、イメージ的には沸きにくい。先日、芦屋のある小学校に行きましたが、そこはタブレットを使った研究をしていて、研究授業を見ると先生もタブレットを使っていました。こういうのが最先端でいいのかなと思ったりしますが、ICTを使用したら最先端かというところそういうわけではありません。結局、2～7階の教育総合センターが8～10階に何を求めているか。どれだけ連携が出来るかですね。

先ほども市長がおっしゃったとおり、教育は数値で表しづらいです。表すのも難しいし、いつ成果が現れるか分からないです。数値は客観的なデータとして大事なのですが、数値に振り回されないか危惧しています。事例をたくさん持っている方がやりやすいし、数値よりも事例だとなんとなく思います。やはり尼崎に来たらどんな子どもも大事に育ててもらえ、温かく育ててもらえるのが大事だし、今の尼崎はそんな雰囲気があって、そこが好きなんです。一方で市民の意識では、学校がダメだというイメージが強い。やはり大学進学率でイメージは作られてしまうので、悔しいけれどそういう意味ではエリート校を作って有名に、となってしまうのは致し方ないかなと思います。スーパーエリート校と聞くとすごく嫌な気持ちはあるけれど、それも市立尼崎がスーパーエリート校として有名になって週刊誌で取り上げられたら、うちの市にすごい学校があるんだというだけでイメージが変わると思います。そこに矛盾は感じますが、イメージ戦略としてはありなのかなと思います。

稲 村 すごく分かります。

仲 島 やはり市立高校があるということは、そういうことが出来るチャンスがありません。

- 稲 村 ありますね。市立尼崎の体育科がある種、成功しました。
- 私が出身大学にキャリア教育の話をして欲しいと言われて行くと、就職出来ない子は本当に出来なくて、内定もらえる子はいくつももらえている。いくつも内定もらえる子と、何度受けてもひとつも内定もらえない子が同じ大学の中で二極分化する時代です。今は非常にシビアになっていて、大学側も危機感を持っているという話です。それを聞いた時に、分かるなと思いました。勉強も出来て社会性もあってその中で自分なりの好奇心を育ててという風に進んでいる子と、受験勉強は出来たかも知れないけど、それ以外は十分発達していない子の大変さみたいなのがあって、尼崎市はちゃんとトータルの力を育むんだという、目指しているあまっこの将来像を打ち出せたらいいと思います。
- 仲 島 元教育委員長の仲野先生の間人塾の話を知っていると、人間は支え合って生きていくものだと、皆が助け合って、そのために何かを尽くしていくものだと、そういう人間としての生き方を言っていますが、そういう温かさに現れる、人間らしい人間の生き方を本当は学んで欲しいです。
- 稲 村 ただ、それを少し研究して見える化しないとしんどいというか不安が解消されないというか。そんなこと言ってやっぱり勉強できる子が世の中で成功しているじゃないかと、皆思っているし、それを否定できるかという否定できない要素もあるわけですよね。そこは当然バランスで、支え合いの心さえ持っていれば全く勉強出来なくていいなんてことはないですし、かといって勉強が出来れば他はどうでもいいわけでもない。当たり前なことなんですけど、それをちゃんと打ち出すという信念をもってやるという、尼崎の教育を。
- 文科省も書類を見ると、そういうようなことを言っています。けれども、保護者は読まないし、知らないから。尼崎市の意思として自分の言葉にして言えたいという気はしています。
- 磯 田 難しいですね。今年は割と就職戦線がゆるいらしいですが、来年はきっと厳しいです。一般企業に行くと、エントリー用紙があって、ある程度学歴などがあって、一次の面接を通過して、人間力は最後になります。一次や二次で何を見るかという、学力が重視されるのが歯がゆいところです。我々も面接官で行く機会がありますが、採用が10人とか5人とかのところに最後残っているのは40人くらいです。市役所も同じかもしれませんが、やはり最初に学力試験があります。人間性を見てもらおうと思えば、最終まで残るしかないのです。そこが保護者が一番不安なところだと思います。それでも人間らしく強く生きてくれたらいいという保護者はそれでいいのですが、今後会社に入って仕事に就かせていくとなると、やはり学力が重要視されます。
- 稲 村 テストの点数だけで言えば、もう少しで尼崎市も全国レベルです。その点数にプラスして尼崎市の教育方針としては、テストがこの点だから OK、満足ではなく、やっぱりこのテストで身についた、応用力、それを自分で使っていく。文科省も色々と、アクティブ・ラーニングとか、問題を自分から発見していくとかしないと国際的に取り残されるというのが分かって、そういう風にしようと思っていると書いていますが、具体的にどうしたらいいかまでは、きっとまだ皆手探りです。だからそういうところも研究してもらったらいいと思っています。
- 私は何回も言っていますが、西宮の学校の先生と尼崎の学校の先生を比べても、一方だけがすごく授業が上手だとは思われない。
- 仲 島 全く一緒ですよ。
- 稲 村 そうでしょう。そのはずなのに、皆西宮は教育がいいって言うんです、尼崎は教育がダメってわけですよ。ただ、自分が身の置く環境というのがあって、どちらが勉強しやすいかっていうのはあるかも知れませんが、これは私の憶測ですが、どうでしょうか。

仲 島 本当にイメージだけで、全然変わりません。

稲 村 大学の進学率は尼崎と西宮でだいぶ違いますか？

徳 田 週刊誌等で発表される 大学に 高校から何人とかいう、あの数字からすると西宮の方がだいぶ高いです。

稲 村 なるほど、それを皆見ているんでしょうか。

徳 田 ただし、それは公立高校や私立高校などありますので、その前の中学校はどこかは分かりません。

稲 村 それは西宮の高校から大学に進学したという。

仲 島 全国の学校が週刊誌に全部書いてあります。それを見て、例えば市立西宮から東大に何人とか、関学に何十人とか書いてあり、尼崎の学校が2人とかだとかなりイメージが違います。

稲 村 すると、皆市立西宮に行きたいというんですね。

濱 田 尼崎市だったら稲園高校が人気です。

稲 村 今は、稲園の単位制がいいとか私は市立西宮で単位制でなく普通の学校でって選べるわけですよ。

濱 田 双星高校がすごい、というのも言われているので、それはやっぱり尼崎で西宮よりたくさん発信して、こんな学校あるんだよというのをもっと発信していく。

稲 村 週刊誌の発信力がすごい。そこはどうでもいいというのもいけない、それだけに振り回されてもいいけない。

仲 島 週刊誌は、はじめは全国の有名な進学校の数値を出しますが、あとでほぼすべての高校の数値を載せるので、その差の大きさにショックを受けます。

磯 田 生々しいのが偏差値化して、偏差値の数値まで出てきている。公立校ですら出ている。

稲 村 そこは引き裂かれながら頑張るしかないのか。

濱 田 頑張るしかないと思います。

磯 田 尼崎市としての発信力はまだ弱い、週刊誌の方が強い。

稲 村 学力・実態調査を見ると、尼崎と西宮の塾に通っている率はそんなに変わらなかったと思いますが、どうでしょうか。

徳 田 この10年間で尼崎は塾への依存度は変わっていません。塾にたくさん行き始めたから学力が上がったわけではありません。西宮の方が塾への依存度は高いと思います。

仲 島 依存度は中学校では下がっています。公立中学校から私立にたくさん抜けるからです。印象が悪くなってしまって、地元の小学校から6割くらいしか公立中学校に行かない学校もある。そのまま行く学校もあれば、そんなところもありますので、一部のイメージでたくさん私立に行っているイメージがあると思います。

稲 村 そんな気がします。たぶん、西宮にしる尼崎にしる一部のことが全部のことみたいにイメージされるんだと思います。西宮だって全員が東大に行くわけではないし、普通の学校で勉強して部活を頑張っている子もたくさんいると思います。一部の人達がどう感じるかで増幅される。

誤解を恐れずに言うと、サピエンチアタワーの新教育総合センター全体では、そういういわゆる進学力を求める人にも軸足をおいて両睨みでしっかりとやっていきたいです。

なぜなら私としたり、こういう風に言われ続けると尼崎の学校の先生や関係者のモチベーションにも関わるんじゃないかと思うんです。こんなに頑張っているのに、あかんあかんと言われて。やっぱり尼崎ってというのはこういうことに問題意識を持ってどんどんチャレンジングにやっているんだという風になると、もっと頑張ろうとかもっとチャレンジしようとか。良い循環を教育の世界に作らないと。そういう意味ではちゃんと、尼崎は教育に熱心じゃないというイメージを打

破しないと。

色んな外部の研究者とも連携したいと思っていますが、今の教育を否定するものではもちろんないですし、学校現場の先生達が違和感を感じて、知らない人達が勝手に研究しに来たみたいになると上手くいかないの、いかにここを上手く連携出来るかが非常に大事だと思いますので、教育委員の皆さまにも間に立って頂きたい。これは今やっている学校に良い循環を作りたいというもの。誤解されないように、丁寧にやらないといけないと。

仲 島 大学の先生の中でも、やはり現場主義で、学校を応援してくれている、一緒に頑張ろう、というタイプの人に来てくれると嬉しいです。

磯 田 一緒に入って頂ければいいですけど、第三者的に見て客観的に学校現場を見られると先生達は違和感を持たれるでしょうね。

仲 島 授業が大好きという大学の先生はいいですね。

磯 田 よくあるのが、学校に資料の提出だけを求めて、学校の先生が資料作りに追われるケースです。

稲 村 研究者の先生もお一人だけでなく、色んな分野・タイプの方々をお願いして、データを分析するっていうタイプから授業をしっかりと、事例を蓄積するケースから色んなタイプの専門家がいいのかな、というイメージをしています。

仲 島 学校の先生は割と、主観的に自分の思いで教育するタイプが多いので、データ分析型のタイプは引かかると思います。やはり両方のタイプが必要です。

稲 村 これから連携したいなと思う先生や関係者の方達に講師に来て頂いて色々な研修会に繋げていきたいと思しますので、教育委員の皆さまにも関わって頂ければと思いますので、是非ともよろしくお願い致します。

以 上